

その他

歌集を編む——体験型授業の実践報告

家 永 香 織

はじめに

本稿は、千葉大学文学部二〇一八年度前期開講科目「古代文学論C」における古典和歌集編纂を中心とした授業実践の報告である。

従来、古典和歌に対して、難しい、堅苦しくておもしろくない、様々な決まり事があったて面倒くさいなどの印象を抱く学生が多く、古典和歌を教材とする授業運営には少なからぬ困難が伴ったものである。

そうした状況に変化をもたらしたのは、二〇〇八年に公示された所謂平成二十年版学習指導要領である。新学習指導要領では、小学校中学年から「伝統的な言語文化に関する事項」が設けられたが、格好の教材として多くの小中学校で『百人一首』が取り上げられた。現在の大学生の多くは、小学生時代にカルタ遊びを通して『百人一首』に触れているのである。

奇しくも新学習指導要領が公示されたのと同じ二〇〇八年、競技カルタに取り組む高校生を描いた漫画『ちは

やふる』の連載が始まる。二〇一一年にアニメーション化、二〇一六―一八年には映画化もされ、若い世代を中心に人気を博した。二〇一〇年には、『百人一首』を題材とした短編漫画集『超訳百人一首 うた恋い。』のシリーズ第一作が発行され、アニメーション化もされて大ヒットする。

これらを背景として、古典和歌に対して学生が感じていた高い垣根は取り払われ、『百人一首』をはじめとする古典和歌への関心が急速に高まった。その結果、古典和歌の講義もかつてに比べ大変やりやすくなった。もはや、(学生により個人差はあるにしても)和歌アレルギーを取り除くことに多大な労力を費やす必要は、ほとんどなくなったと言つてよい。

稿者は和歌研究者として、この期を逃さず次の段階に進みたいと考えた。すなわち、教員から示された和歌を読む受動的学習から、自ら和歌の海に分け入り、できるだけ多くの和歌に触れ、自分なりの鑑賞をするという能動実践的学習へとレベルアップを試みたのである。そのための具体的作業が、今回の歌集編纂である。なお、受講生は二―四年生と科目等履修生計四十名で、他に数名の大学院生も聴講していた。

一 歌集編纂まで

まずは、十五回の講義のうち七回を使って、様々な歌集・歌合について解説を行った。学生は勅撰集¹撰者になることは不可能だが、自由に編纂できる歌集の種類は多岐にわたる。この機会に多種多様な歌集の形態とそれぞれの特徴について学習すると共に、自分はどうのような歌集を作りたいか、ヒントを拾いイメージを膨らませて欲

しいと考えた。

七回の講義内容は以下の通りである。

〈第一回〉

和歌とは何か

和歌の特質について概説し、和歌が古典文学の土台であることを確認。

〈第二・三回〉

他撰私家集

他人詠を多数含む私家集、歌物語的配列が見られる私家集、個人ではなく一家の和歌を集成した集団的私家集など、様々な私家集について解説。

〈第四・五回〉

私撰集

地名歌を集成した私撰集、特定の氏族の歌を中心に集成した私撰集、勅撰集に対抗する意図で編纂された私撰集、物語の作中和歌を集めた私撰集、歌語辞典的性格を有する類題集など、様々な私撰集について解説。

〈第六回〉

異種百人一首と三十六人撰

所謂『小倉百人一首』以外の多様な百人一首（『新百人一首』『武備百人一首』『女房百人一首』他）、藤原公任編の秀歌撰『三十六人撰』とその形式に倣った秀歌撰について解説。

〈第七回〉

歌仙歌合・物語歌合

『前十五番歌合』のような歌合形式の秀歌撰、『物語二百番歌合』のような物語の作中和歌による歌合について解説。

学生の多くは、『万葉集』や『古今和歌集』『新古今和歌集』など著名な歌集以外の作品については、深く学んだ経験を持たない。第二―七回の講義により、学生は歌集の多様性に新鮮な驚きを感じたようである。二人の学生のコメントを引用したい。「ここまでの授業で、色々な和歌集を見てきて、種類の多さに驚いた。様々な観点から歌集が作られているので、少し自分でもできるかもと思った」(二年生)、「毎回の講義を聞いたたびに、こんな歌集もあるのか!と新発見の連続だった」(三年生)。

二 歌集編纂の過程

第八回目の講義から歌集編纂の作業に入ることになるが、学生にとって古典和歌を集めて歌集を作るのは初めての経験である。段階を追って作業過程を丁寧の説明することを心掛けた。なお、編纂する歌集については、①撰歌範囲は上代から近世まで、②歌数は五十首以上とする、という二つの条件を設けた。

〈第八回〉

資料紹介

和歌を集成するために利用すべき文献やデータベースを紹介。

作業計画作成

形式（私撰集・秀歌撰、私家集、百人一首、歌合の中から選択）、撰歌対象（どのような歌、あるいは誰の歌を選ぶのか）、撰歌の方法（どのような資料をどのように用いるのか）の各項目に基づき作業計画を作成。教員は個別に質問に答えた。

〈第九回〉

和歌の集成作業

一斉授業は行わず、各自図書館などで作業。教員は図書館にて待機し、随時質問を受け付けた。

〈第十回〉

部類・配列・題名設定

教室にて各自作業。

装訂方法の学習

写真を提示しながら和書の装訂について解説。

〈第十一回〉

清書・製本

清書をした後、製本（綴じ方は粘葉装²、表紙の付け方は包背装³）。

題簽に筆ペンで題を書き、表表紙に貼る。裏表紙には自分の氏名を書く。題も氏名もくずし字にした。

料紙と題簽は教員が準備。表紙用の紙は学生が各自持参。美麗な包装紙、和紙、布地（紙に貼って使用）など様々な表紙が用意された。中には和紙店や生地店でイメージに合った物を購入してきた学生、亡くなった祖母の着物の生地を利用した学生もいた。

まとめ

「私が編纂した歌集」と題するプリントに、歌集の題名・内容の紹介・アピールしたいポイント・苦心や工夫をしたポイント・作業の感想や反省をまとめる。

和歌集成作業は授業二回分取りたかったが、全体のスケジュールの都合により一回分となった。第九回の授業で終わらなかつた分については、授業時間外に各自取り組むよう指示したが、第十回の授業時に集成作業が終了していない学生も見られた。一方、早くから自分なりに和歌を集め始めていた学生もおり、作業の進展には個人差が生じた。最も重要なプロセスである和歌集成のための時間を、もっと確保すべきであったというのが反省点である。



三 発表と批評

第十二～十四回の三回分を使い、すべての学生が自分の編んだ歌集の発表を行った。教材提示装置を用いてプロジェクターに歌集を映しながら、歌集の題名とその意味、編纂方針や内容の紹介、アピールしたいポイントや苦労した箇所、特に気に入っている歌などについて、一人三分程度の発表とした。時間があれば質疑応答の時間を取りたかったが、その余裕がなかったことが残念である。

発表者以外の学生には、それぞれの歌集について簡単なコメントを書いてもらった。また、各回につき一人五点の持ち点を、良いと思った歌集に投票させた。コメントは教員が目を通した上で、教員による講評と共に最後の授業の際に本人に手渡した。

学生のコメントにおざなりな物はなく、心のこもった感想が綴られていた。自分が苦労して仕上げた作品に対してコメントが得られたことは学生にとって喜びであったようで、最終授業のコメントシートでは「発表直後から、もっとあれについて言及すればよかった、という後悔が大きかった。しかし、今回の私の作品に対するみなさんの評価を拜見すると、私の主張を汲んでくれた人が多くいることがわかり、後悔の気持ちは消えてしまった」（四年生）、「自分の歌集へのコメントを読んで、思っていたより温かいコメントが多くてとても嬉しかった」（二年生）などの感想が見られた。

なお、学生の投票に基づき、最優秀賞一名、特別賞一名、優秀賞三名を決定し、最終授業の際に発表し、全員の手拍りで讃えた。

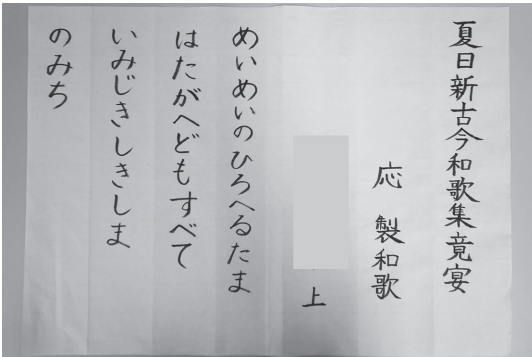
四 竟宴和歌を詠む

前期授業開始当初、本学人文科学研究院の柴佳世乃教授より、歌集編纂を終えたら、新古今和歌集竟宴⁽⁴⁾に倣って模擬「竟宴」を行ってはどうかという提案があった。装束や披講の専門家にも協力を依頼し、公家装束を着け故実に則った和歌披講を行うなど、十六回目の特別授業として新古今集竟宴の再現を行う計画を立てた。

そのために、学生たちには前もって『新古今和歌集竟宴和歌』の解説を行い、和歌の伝統を言祝ぐ、和歌や歌道の素晴らしさを讃える、歌集完成を祝う、歌集作成に伴う感想、和歌を読む楽しさや和歌を学ぶ喜びなどの主題で、各自が竟宴和歌一首を詠んでくるという課題を出し、十五回目の最終授業において和歌の清書をした。

最初に和歌懐紙の書式の故実について、歌論書や現存する懐紙の写真を利用しながら解説した。端作や署名の書き方は、『新古今和歌集竟宴和歌』に倣うこととした(但し、新古今集竟宴は三月であったが、今回の模擬「竟宴」は夏なので、「春日」とあるところを「夏日」に変えた)。教員が全懐紙(約四八センチメートル×三六センチメートル)を用意し、各自が筆ペンを用いて清書を行った。これほど大きな紙に筆ペンで文字を書いた経験がない学生がほとんどで、苦勞しつつも楽しんでる様子がかがえた。学生のコメン

(氏名部分を加工してある)



トを引用する。

「懐紙一面いっぱい自分の歌を清書するという体験はすばらしいものだった」(二年生)

「こんな綺麗な紙に字を書いたのは初めてで、楽しかった」(二年生)。

五 特別授業—模擬「竟宴」

八月二日午後、アカデミック・リンク・センター(コンテンツスタジオひかり)において、特別授業を行った。諸事情により、装束の着装と正式な披露は実現に至らなかったものの、私たちなりの和やかな「竟宴」となった。

① 新古今和歌集竟宴の場の再現

藤原定家は『新古今集』撰者であるにもかかわらず、竟宴を欠席した。しかしながら日記『明月記』(元久二年三月二十七日条)には、竟宴次第を細かに記録している。その記述に基づき、竟宴のしつらいを再現してみた。

後鳥羽院と公卿の座として畳の代わりに莫塵を敷き、文台の代わりに経机を置いた。新古今集竟宴では、文台に『新古今集』が置かれていたが、今回は学生が編んだ歌集の中で最優秀賞を獲得した『しの、め』を置いた。参加者の中から七名を指名し、後鳥羽院と摂政太政大臣藤原良経以下六名の公卿役を割り当て、『明月記』に記された通りの順番で着座してもらった。続いて、実際の竟宴では『新古今集』の序と冒頭四、五首が読み

上げられたが、代わりに『しの、め』の冒頭四首を読み上げた。

② 竟宴和歌発表

参加者が一人ずつ前に出て、自分が書いた懐紙を披露しながら和歌を読み上げ、どのような心情を詠んだのかを発表し、教員が一人一人の和歌についてコメントした。

ここで、学生たちの竟宴和歌の何首かを紹介したい。初回の講義において、和歌が千数百年もの間、変わらぬ形で詠み継がれていることを強調したが、学生たちは歌集編纂を通し、そのことを身をもって感じ取ってくれた。

世の中に常てふことはあらねども 和歌の道こそ久しかりけれ (四年生)

千代までも寄せし玉藻をまた集め 和歌の浦風八千代へぞ吹く (大学院生)

多数の和歌に触れる中で、日本語の美しさにも気付けたようである。

美しきやまと言の葉やはらかに 道を学べる者のみぞ知る (三年生)

歌集を編むことの喜びや苦勞を詠んだ歌もあった。

言の葉の玉を集める喜びは 今もむかしも変わらぬものよ (二年生)

いにしへのやまと言の葉ながめ見て 選び集めるこの難しさ (三年生)

また、和歌を読み作者の心情を理解し、彼ら彼女らも現代の自分たちと変わらぬ思いを抱いていたと知ることができた。歌集編纂の作業は、いにしえの歌人たちの思いに寄り添うことでもあったのである。

集めたる恋の言の葉いつの世も うつりゆくのは心なりけり（二年生）
時を越えあまたの人に届く歌 いにしえ人の息吹伝える（三年生）

③ 歌集閲覧会

歌集の発表を行った際、「この歌集を是非読んでみたい」というコメントが少なからず見られた。そこで、特別授業の最後は他の学生が編んだ歌集をじっくりと読み合う時間とした。

机の上に全員の歌集を並べ、参加者は気になった歌集を自由に手に取り鑑賞した。何人もが一冊の歌集を囲んで論評し合ったり、歌集の撰者が他の学生に対して説明をしたりするなど、終始楽しげな雰囲気であった。



六 歌集の紹介

学生が編纂した歌集の幾つかを紹介しよう。題名の後の紹介文は、学生自身が書いたものから適宜抜粋してまとめた。

『しの、め』（二年生）

平安・鎌倉期の勅撰集と私家集から、後朝の歌を集めた歌集。撰歌基準は、「自分が贈られて嬉しい歌」。自分が愛されていることが実感でき、わざとらしすぎず、言葉のテンポが良いものを選んだ。時代順に配列。

何百年も前に生きた人々の魂のこもったラブレターが現代まで伝わり、それが平成に生きる大学生の手によってまとめられ発表されると思うと、不思議な気持ちになる。

『旅衣』（二年生）

藤原定家の歌から、旅の歌を選んだ歌集。春夏秋冬十首ずつ、海と山の旅の歌七首、一人旅の寂しさなど心情の歌三首の計五十首。この歌集を読むだけで、旅をしている気持ちになれるような歌集をめざした。各季節のはじめの歌に、絵を入れた。表紙の青と銀色で、旅の空を表現した。

大学で本格的に和歌に触れたのは、この授業がほぼ初めてで、和歌や歌集のルールも手探りで、講義から学んでいくことになった。

『パベルの大樹』（二年生）

『万葉集』『古今集』の恋歌と『百人一首』から歌を選んだ秀歌撰。日英対訳とした。一頁に一首、和歌を縦

書きにし、右頁は和歌の右上、左頁は和歌の左上に英訳を載せ、樹木をイメージしてレイアウトした。配列は、恋の進行を暗示するようにした。恋歌以外の歌も盛り込むことにより、世界観に奥行きを出し、また恋歌的解釈を付与した。

今回の歌集編纂は、言語の可能性を考える上で大いに刺激となった。

『盛者必衰』（三年生）

『保元物語』『平治物語』『平家物語』を中心に、力を持つ者が移り変わっていく流れを汲みつつ世を憂えている歌や、敗者の嘆きが表現されている歌を採集した。歌の意味や共通する言葉、人物関係を考慮した上で組み合わせを考え、歌合形式にした。

和歌に注目して軍記物語を読んだことはなかったので、新たな観点で物語を読むことができた。

『ある夏の夜』（大学院生）

ある夏の夜（陰暦六月十八日〜廿二日。月の出がやや遅い時期）の天候の経過、広がっている風景の様子を、古典和歌を通して綴った歌集。いわば「歌物語風プラネタリウム」といえる作品。

「この歌集に収められている歌を読むだけで、その日の夜、いつどこでどのような風景が見られたかが分かる」ことをコンセプトとした。

これら以外にも、藤原道長・道綱兄弟の和歌を番えた歌合、生まれ故郷である宮城県の地名が詠まれた和歌を集めた歌集、『百人一首』の歌人の『百人一首』に選ばれた歌以外の歌を集めた新しい百人一首、女性歌人が恋の激情を詠んだ歌を集めた歌集、『万葉集』と近世和歌の「あ」で始まる歌を内容や表現によりペアにして配列

した歌集、吉田松陰の和歌を多くの著作から集めた私家集など、個性豊かでバラエティに富んだ作品が作られた。教員として望外の喜びであったのは、歌集を編纂する中で、古典和歌や歌集の特色について学生自身による様々な発見があったことである。例えば、ある特定の歌語が含まれる和歌を集めた学生は、時代によりその語の詠まれ方に変遷があることを学んだ。また『古今集』と『新古今集』から和歌を選ぶ中で、それぞれの集の個性に気付くことができた学生もいた。教えられて知るのではなく、作業を通して学生自ら知識を得たことは、体験型学習の重要な成果と言えるであろう。

さいごに

今回の授業内容は教員にとっても初めての試みであり、学生がどれほど積極的に取り組んでくれるか、おもしろいと感じてくれるか、不安も抱いていた。しかし、学生たちの旺盛な知的好奇心と学習意欲に助けられ、大変に充実した授業になったと感じている。

最後にコメントシートなどを通して学生から寄せられた感想の幾つかを示して、まとめて代えたい。

「歌集を作るということを、もちろん今までしたことがなく、歌集を作っている時から発表まで、すべての時間で不安を感じていた。また、自分のテーマが『百人一首』ということもあり、和歌に触れる量も膨大なものとなったため、大変だった。しかし、歌集を作り終えた後の達成感は、その分多く感じられた」(二年生)

「最初は、歌を選ぶだけなら簡単だろうと考えていたが、いざ選ぶ段階になると様々な苦労があり、題意に

沿ってたくさんさんの歌の中から選び取ることの難しさを感じるとともに、定家も同じような苦勞をしながら選んだのかな、と思いを馳せた」（二年生）

「自分で歌集を作成したり、竟宴和歌を作ったり、普通は体験できないことをでき、古代や中世の空気に触れることができた」（三年生）

「授業を受ける前の和歌の知識が乏しい自分から、講義や歌集の作成を通してすごく成長できたと思う。今回ほど和歌を学んだことはなく、和歌の魅力を知ることができて、とても良い機会になった」（三年生）

注

- (1) 天皇・上皇の下命により編纂される歌集。
- (2) 和書における製本方法の一種。
- (3) 綴じた料紙を一枚の表紙でくるみ、背を糊付けする方法。
- (4) 『新古今集』完成を祝う宴。『新古今和歌集竟宴和歌』が詠まれた。

〈付記〉

今回の授業、とりわけ特別授業開催に関しては、柴佳世乃先生とアカデミック・リンク・センターのスタッフの皆様にご多大なご支援・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。なお、特別授業の様子は動画としてYouTubeにて限定公開されている。